

月刊

いじろのとも

第六卷

四月号

感謝報恩・反省改悛

感謝報恩

反省改悛

いま

多くの人が

感謝しても

報恩しない

反省しても

改悛しない

感謝したら

報恩しよう

反省したら

改悛しよう

いじろの階段

ヨーガして

毎日々々

一歩ずつ

こころの階段

降りて行くなり

人生を考え直して

みたい人は（十六）

『老子』解説（十五）

今月号は第六十二章を取り上げます。

（第六十二章）道は、万物の主（ぬし）です。
それは、善人にとって宝であるだけでなく、善人でない人にとつても自らが包容され、保持されるものなのです。ですから、人の為す不善も何ら棄てることはないのです。

この章も、深い真理を述べています。
先ず、出だしの「道は万物の主です」という言葉ですが、これは、キリスト教の旧約聖書の出だしにある創世記の、そのまた出だしにある「初めに、神が天と地を創造した。」を思い出させます。創世記では、この天と地の創造に次いで、つぎつぎに、人を含めて地上のあらゆる存在物を具体的に創造していく様子が述べられています。この章の出だしも、具体的ではありませんが、そ

れに対応していると言えます。

実は、この世の存在物が主によって創造され、「贈られてある」ことを、精神の全て（私のモデルで言いますと、五つの精神領域、つまり、たましい、あたま、からだ、こころ、むいしき、の全て）で知ることが、あらゆる宗教の究極とも言えるのです。

この、道が万物の根源であるということは、既に、これまで何回も出てきました。昨年の三月号、五月号、九月号、十一月号、などです。ご確認下さい。

この章の残りの部分は、少し難しいのではないかと思います。一つずつ解説して行きます。

初めに「（道は）善人にとって宝である」という部分ですが、何故、道が宝なのか説得力ある説明は、どの解説書を見ても、出ていません。

実は、道を体得することのすばらしさについては既に、殆ど毎号のように述べてきたことです。ですから、それだけでも道が宝であり、全てを包容し、維持するものであることは、ご理解頂けると思うのですが、ここでは、善い人とはどんな人で、その人にとって宝であるとはどんなことなのか、あるいは善人でないとはどんなことか、そうした人でも包容され、維持されるとはどんなことなのかをもっと直接的に説明しておきたいと思えます。

少し理屈っぽい話になって恐縮ですが、私は、人間の生きる現実（実存）の姿（心理）を具体的に捉え得ると考えられる「自己・他己双対理論」を提示しています。が、それによりますと、「自己」の側の基本命題は「人間は、自分自身を知ることを目指して、より善く生きようとする存在である」で、「他己」の側の基本命題は「人間は法を目指して、より善く社会的であろうとする存在である」となっています。

人間は、日々を、この二つの命題の弁証法的統合（自己と他己を揺れ動きながらバランスを取ること）の過程として、生きていけると言えるのです。

この章の解説に必要な点についてだけ、この命題について少し説明をしておきたいと思います。先ず「自己」の側の「自分自身を知る」とはどういうことかということですが、それは、「自己」の側に属する精神領域の五つの働きである、自我、認知、感覚、情動、生命蔵（煩悩蔵・個人的無意識）の全てで、自分自身を知ることの意味します。詳しくは、本誌第三巻十月号か、『ひとで悩みたくない人は』（大東出版社刊）一九八頁以下か、『人間精神学序説』（風間書房刊）第一章をご参照下さい。

いま問題となっています「自分自身を知る」ことを各

精神機能について具体的に言いますと、情動では、どういう時に人間は、快いのか、快くないのか、悲しいのか、嬉しいのか、楽しいのか、辛いのか、落ち込むのか、うきうきするのか、腹が立つのか、恐ろしいのか、とか、腹が減り、喉が渇くとはどんなことなのか、性的欲求とは何なのか、人より優れるとは、人に勝つとは、どんなことなのか、などを実際に体験して知ることなのです。

感覚で「自分自身を知る」ということは、五感（目、耳、鼻、舌、触）に感じるあらゆる体験をしてみることが意味します。それらは、勿論、その下位精神機能領域である情動を基礎にしていることは言うまでもありません。つまり、目で見えるものは、情動を引き起こし、それによってその見たものが、評価されます。快であれば、再び体験したくなるでしょうし、不快であったり、苦痛であったりしますともう二度と味わいたくないと思うでしょう。これは、他の感覚についても同様です。

認知で「自分自身を知る」と言いますのは、いろいろあたまで考えたり、知ったりする、実際の体験を意味しています。一般的に言えば、こうした体験によって出来るだけ多くのことを考えたり、知ったりすることは善いことと言えます。勿論、感覚と同様に、認知の下位にある精神機能領域が前提とされることは言うまでもありません。

せん。情動と感覚の体験のないことは、いくら考えたり知ったりしても、自分のあたまには入っていきませんし、考える内容がどんな情動的色彩を帯びるかによって、認知作用は大きな影響を受けます。

自我で「自分自身を知る」ということですが、自我は、これまで述べた情動、感覚、認知の各精神領域で何が起こっているかモニター（探知）し、それらの統合をはかり、自分が目指す（目的とする）行動にそれらを組織化する働きですから、自我の領域で自分自身を知るとは、そうした働きを体験することだと言えます。具体的には、自分で計画し、自分で実行し、自分でその結果を評価して、成就の喜びや失敗の悲しみを味わうことです。そうすることで自我の内容は豊かになり、自分自身を知ることになって行くのです。

これまで述べた、四つの領域はいずれも意識して出来るものです。しかし、残った生命蔵は無意識の領域にあります。ですから、意識で、直接に統制することはできません。

この生命蔵で「自分自身を知る」とは、実は、自己ではなく「他己」にある如来蔵（集合的無意識・仏性・神性）との統合をはかることなのです。意識では分からないわけですから、体験のない人には信じて頂く以外には

ないのですが、それは、仏（神）さまと自分が一体となることなのです。

人は生まれたとき、生命蔵と如来蔵は未分化で一体なのですが、成長の過程でそれらは徐々に分離していきます。実は、成長の過程を通じて意識の領域で多くの体験をし、自分が「できる」と思えば思うほど、その分離の程度が大きくなり、如来蔵は自己への執らわれの垢で覆われてしまうのです。そうなりますと、意識の領域で幾ら体験を多く味わって、自分自身を知ってみても、本当の自分自身を知ることにはならないのです。逆説的に言いますと、そうして意識の水準で多くのことを知れば知るほど、知った、できた、という執らわれが生じてしまい、悲しいかな、人間は自分自身を本当に知ることからどんどん遠ざかっているのです。つまり、無意識の生命蔵と如来蔵との統合が困難になってしまうのです。

「自分自身を知る」ことはこのぐらいにして、基本命題の次の、「より善く生きようとする」という部分に進みます。

人間は、既に見ましたような各精神機能領域でより自分を知ろうとして、今日より明日、明日より明後日、というように、未来を目指してより善く生きようとしています。そしてもっともより善い生き方は、既に見たとこ

るから明らかのように、結局は、無意識の統合をはかろうとする生き方になるのです。ソクラテスで言いますと「無知の知」を指す生き方ということになります。

ですから、この章にありますように、真の善人にとつて道、つまり私の理論で言いますと、如来蔵（道の人間精神への直接的分化・反映、動物段階では生命蔵も如来蔵も未分化・一体で成長しても分化しない）は、絶対なる自分を知るもつとも大切なもの、宝にあたるのです。

人間は、動物と違って、自分を意識することができるようになりましたが、その裏返しとして、自分では思い通りにならない他者（生老病死）も意識できるようになつたのです。その思い通りにならない他者の根源としての如来蔵（道である主）を知ることが、真の安心にいたる道と言えるのです。そのとき、無意識だけではなく、意識の水準でも自己を知ることが、他己を知ることと同じになるのです。老子で言いますと、「為さずして（無為）為さないということがなくなる（自然）」のです。

次に、この章の、「善い人と言えない人も包容され、保持される」という部分に進みます。ここで、善い人と言えない人とは、道の体得を目指さない人だと思えますが、そうした人も道によってこの世に創造され、贈られであり、やがてまた元に帰って（死んで）行かなければ

ならないのです。私たち人間を存在せしめる主体は、私たちの力を超えた主（神、仏、空、など）なのです。ですから、善人も不善人もみんな道に包容され、保持されていると言えるのです。こうした、私たちの存在の真理を悟った人だけが、真に善い人といえるわけです。そうした人は、罪も死も超えることができます。そして、誰でもがそうなれるのです。

本章の最後の、「不善も何ら棄てる場所はない」という部分に進みます。既に見ましたように、この世の存在は、すべて主によって贈られてあります。たとえ不善と思えるものも、絶対な他者（主）の現れなのです。ここでは、善悪を超えているのです。あらゆる存在は、存在することを許されているのです。何ら棄てられるところはないのです。

私たちは、深い業の中に存在しています。それは、私たち先祖の業を受けついでいると言えます。親の業を受けついでいるのです。親は、またその親の業を受けついでいます。たとえ悪をなしても、それはその人の業なのです。

私たちに出来ることは、自分が業から抜けること、つまり修行して道を体得すること、そして他者を業から抜けさせてあげることなのです。

自作詩短歌等選

子育ては己育て

子育ては
己（こ）育て
子供を育てる
ということ
自己を育てる
ということであり
他己を育てる
ということである

世の中変わらぬ

世の中の
制度法律
変えたとして
人のところが
変わらなきゃ
本質的に
変わるわけなし

神（仏）がすたれて

人心に
神（仏）がすたれて
仁おこり
仁がすたれて
義務おこり来る

よそよそしい親

いま
子どもが
親によそよそしく
なっている
いじめられても
いじめても
親には言わない

それは
親自身が子に
よそよそしく
なっていることの
直接的反映

愛情を薄くし
統制ばかりを
していたり
自由放任にしている

直接的結果

遺伝子操作

いま
医学が
人間の遺伝子を
操作して
病気を
治そうとしている
それが
生命への執着で
あることに
気付いているのか
危険であることに
気付いているのか

親に合わない子

いま
親は
子が
自分に
合わない
と言う
じゃあ
子は
どうしたら
いいの

すべて偽善

無意識に
宿すところの
仏さま
光らぬうちに
為すことは
すべて偽善と
なりぬるを
気付けぬ衆生
哀れなりけり

そこで完結

きょうを生き
今日を死ぬると
知るならば
あらゆる時が
そこで完結

大日如来のごと

黒き雲
切れてお日さま
輝けり
大日如来の
お出ましのごと

自作随筆選

自殺の自由

人間には、自殺の自由があるのでしょうか。
キリスト教では、自殺は罪悪である、とされています。
たしかに、何かの苦しみがあつてそれから逃れるために、
あるいは、生きていても大して喜びが感じられないから、
自殺するというのは、人間として、してはならないこと
のように思われます。

私たちは生まれる時、自分の意志で、時と場所を選ん
で生まれて来るわけではありません。ただ「贈られてあ

る」だけなのです。死についても、同様です。普通は、自分で時と場所を選んで死ぬるわけではないのです。向こうから勝手に迎えが来るのです。それは、事故や病気であるかもしれませんが、天寿を全うする老死かもしれません。

このように、人間は、自分の存在にとつてもつとも重要な生と死が、他者、それも人間を超えた他者によって勝手に決められていて自由にはならないように、運命づけられているのです。ここに人間存在の根源の様式があります。(しかし、現代人は頭でつかちになり、個人に閉じていて、このことに「あたま」だけではなく、「こころ」と「からだ」で気付くことが、できなくなってしまうが。)

このように、人間の自由にならない死を、自殺という行為で自由にするのが許されるとは、普通は考えられません。

しかし、私は、自殺が許される場合があると考えています。それは、この人間の根本的な存在様式が、あたまと、からだと、こころの全てを統合して分かっているときなのです。

そうしたときの自殺は、生きることが苦だからではなく、生きることがこの上ない喜びであっても、他者に迷

惑をかけたたり、あるいはもつと言いますと、他者に役立たなくなつたときの自殺なのです。人間には、そうしたときだけ、自殺が許されるのです。しかしその場合に、自殺の方法が問題になります。首を吊つたり、毒を飲んだり、高いところから飛び下りたりといった、通常の自殺方法は許されません。

許されるのは、自分の生き延びたいという欲望に打ち克つて行う方法、つまり食べたり飲んだりしないで、その苦しみに打ち克つて死んでいく方法だけなのです。ですから、それは苦しみから逃れるためではないのです。逃避のためではないのです。それよりもっと大きな苦しみに打ち克たなければならぬものだからです。

因みに言いますと、人間の真の自由は、この自分の欲望に打ち克つ自由、自分の業から逃れる自由、解脱に至る自由だけなのです。欲望を追求したり、お金を貯めたり、名声を得たりする自由もありますが、それは、自分の自由にならないもの、自由にしてはならないものを自由にしよとする、人間の根本的な存在様式に気付かない人の自由なのです。まして、人を自由に支配したり、環境を支配したりする自由は、他者との関係を含み、もつとも人間としては制限されるべき、あるいは制限をうける自由と言えるのです。

このように、人間の真の実存が分かっている人、生きる喜びが勝手に湧いてくる人、自分の欲望の統制が自由に出来る人、人の役にたつことだけが自分の生き甲斐となっている人、そういう人だけが、自分が人の役に立たなくなったとき、自分の得た人間としての最高の自由を行使して（つまり、自分の欲望を統制して）、自殺する自由があるのです。それは、食事を断ち、水を断って、枯れるがごとく死んでいく方法なのです。

それを現実に行った人に、弘法大師・空海がおられます。

先日（三月十二日（日））、再放送でしたが「旬の人の話」で、分子生物学者・長田重一氏（四五歳、大阪バイオサイエンス研究所勤務）に対する「『細胞の自殺』から生命の謎に挑む」と題する、葛西アナのインタビューを聴き、前から書こうと思っていた自殺の自由をテーマに、前記の文を書きました。

このインタビュは、以前も随筆にしたように思うのですが、とても印象に残るものでした。

細胞には「自殺（死）のプログラム（アポトーシスと呼ぶそうです）」があつて、あるホルモン（たんぱくしつ）が細胞膜に触れますと、細胞にはそれを感じる受容体があつて、自殺のスイッチがオンになり、その細胞は

死んでいくのだそうです。この装置によつて不要になつたり、害毒になる細胞は死んでいき、人間の生体は生命を維持しているのだと言います。

ところが、病気になるますとこのメカニズムが働かなくなつてくるといふわけです。生体の維持にとつて、有害で、自殺のプログラムが働いて死んでいかなければならないのに増殖してしまふ細胞として癌細胞があり、有益で、死んではならない細胞なのに自殺してしまふ細胞として、劇症肝炎に罹つた肝臓細胞がある、ということです。

人間の生命維持という明確な目的のためには、どの細胞を自殺させ、どの細胞は自殺させないか、私たちにとつて、きわめて明確であり、また医療の問題として大切です。人間を細胞と考えた場合、どの人間を生かし、どの人間を自殺させるか、それを決めることは、もちろん、出来ません。どこまでも、自分が自分で判断し、自分が自分で欲望に打ち克つて、自分が自分で自殺する以外にはないと言えます。

しかし、自分で自分の欲望を制御して（食と水を断つて）自殺できる人が増えることが、全体として人類が滅亡を避け、人類の生命を維持していける道のような気がしてなりません。

釈尊のごとば（二四）

法句経解説

（一二七）大空の中にも、大海の中にも、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにいても、悪業から脱れることのできる場所は無い。

（一二八）大空の中にも、大海の中にも、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにいても、死の恐怖のない場所は無い。

この二つの偈には、難しい言葉は一つもないと思います。これらは、殆ど同じことをいっています。本質的には、「悪業」と「死の恐怖」とが違うだけです。意味は、世界のどこにも悪業や死から逃れられる場所はない、ということを行っています。

まず、前者の偈ですが、悪業（悪い行い）は、人との関係でなされると、一般的には考えられますので、人けのない所へ行けば悪業をなさないですむと思えますが、常識に反してどこに行っても、悪業から逃れられないと言っているのです。

では、悪業とは何なのでしょう。

『老子』の解説でも述べましたので、繰り返しになりますが、人間は、一方では、自分自身の生まれた意味を見つめようとして、今日よりも明日、明日よりも明後日と、常により善い明日を目指して生きています。また、他方では、客観的な道理である人の道、仏の道にそった生活はどうすればよいかを求め、より善く社会の人々、つまり他者を尊重した生活することを目指して生きています。

ですから、たとえ他者との関係のない所へ行っても、自分自身の生まれた意味を見つめようとして、より善い明日を目指して生きて行かなければ、悪業を逃れることは出来ないのです。

自分自身を知ることを目指して、より善く生きようとして、修行・精進していますと、釈尊が誕生と同時に言われたとする「天上天下 唯我独尊」という絶対自己の自覚に達することができます。その時、私の理論で言いますと、無意識の生命蔵と如来蔵とが統合されるのです。そうなりますと、自己があらゆる存在と一体で等しいと感ずることができるのです。それは、社会と一体であることを意味します。

このように、自己を追求して生きていますと、根っこのところ（無意識）で統合がもたらされるわけですが、

そうなりますと、他己の目標である法の体得も同時に達成されるのです。これを、無意識ではなく意識の水準で言いますと、「絶対自己の自覚」即「絶対他者の自覚」と言えるわけです。

人間は、どんなに人けのないところへ行っても、たった一人で生きていくことは不可能です。誰かと必ず接触しなければなりません。そうなりますと、真に自己を追求して生きていない人は、自覚しなくても悪業をなしてしまうというわけです。

後者の偈に移ります。この偈は、世界のどこへ行っても死の恐怖から逃れることはできない、というものでした。これは、誰でもが実際に体験していることで、前の偈に較べて分かりやすいのではないかと思います。

あらゆる欲望をほしのままにした中国の王の話は何度も例として上げてきましたが、どんなに「自己」を意識水準で実現してみても、自己の限界は、人生の総括であるこの死によってもたらされるのです。結局、支那の王さまも、この死の恐怖や不安から逃れることはできませんでした。

実は、既に述べましたように、修行・精進を通じて、真の自己を知りますと、絶対な安心・絶対な幸福を得る事が出来ます。死を超えることが出来るのです。実際に

は死んでいきますが、その死を悔いることが全く無くなってくるのです。安らかに死んでいくことができるのです。もう自分が生きていても意味がない、あるいは他者に迷惑をかけるだけだと思えば、飲食を断つても自らの意志で喜んで死んでいけるのです。

どこへいっても逃れられなかった死の恐怖が、嘘のように、どこへいっても逃れておられるのです。こうした死を超えた生は、たとえたった一日であっても、その人の意識の上では何万年も生きたと同じ意味をもっているのです。ですから、そうした境地に達つそうとしていないで、あるいは達していないで、例えば、いま四十歳の方が、百歳まで生きたとしても、たいした意味はないのです。「人生五十年、ゆめまばろしの如し」なのです。

読者とのエコーコミュニケーション

俳句

起きぬけの敷居またげば匂い鳥

遙かより近よりて見る山桜

軒定め猫のとどかぬつばめの巢

(徳島県・須藤一樹)

後記

一、「人生を考え直してみたい人は」の『老子』解説が終わった後は、いつになるか分かりませんが、キリトを取り上げたいと思っています。そんな予定もあって、ぼつぼつですが、キリスト教関係の本を読み始めています。先日、波多野精一著の『原始キリスト教』（岩波全書）を読みました。

二、私は、かつて新約聖書の「山上の垂訓」の部分だけを読んで、キリストが解脱していたことを知りましたが、波多野の本を読んで、私の思っていた通りであることが感動をもって、確認できました。

三、キリストが、自ら神を直観的に実感し、体験していたこと、神との合一（人格的交わり）を体験するために、人無き密室に入り、静かにお祈り（瞑想）することが大切であることを説いたこと、などがとても目を引きました。細かい点は、キリストの連載が始まってから、述べていきたいと思っています。キリスト教の新生になることを期待して書きたいと思っています。

四、最近、家庭用の書棚を十本ほど買い足しました。高さ一八〇㊦、幅八〇㊦、奥行き二五㊦、棚六段のもので、天上までの空間がもつたないと思ひ、大学でコピー用紙の空箱（B5）をもらい、六個を三個ずつ二段に

重ねてボードで張りつけ、本立てとして書棚の上に置いています。補強としてベニヤ板を使っています。

五、本を読む時の書見台もコピー用紙の空箱（A4）で作っています。とても重宝しています。

六、最近、哲学や宗教の本を読むことが多いのですが、読んでいて感じることは、当たり前と言えそうですが、書く人のレベルに応じて書いているということですが、哲学や宗教はその人の生き方そのものから出てくるのですから、当然なのですが、題名だけにひかれて読んで、ばかばかしくなります。時間がもつたないという気になります。これも、一つの情報公害なのでしょう。

月刊	平成七年四月八日
こころのとも	〒772 8502
第六卷	徳島県鳴門市鳴門町高島
四月号	鳴門教育大学 障害児教育講座気付
(通巻 六十四号)	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	